

I M E T S

Improvement of Media Education and Teaching Studies

アイメッツ

'97

No.125

Vol.1

メディアの特色と 授業発想の転換

●特集1

解説Part1 授業の変革とメディア活用

解説Part2 総合学習におけるマルチメディアの活用

小学校実践1 調べ学習がメディア活用で変わる

小学校実践2 パソコンは構想、表現活動の夢を広げる

中学校実践1 深い思考操作を創る素材選定とパソコン活用の工夫

中学校実践2 パソコン創作絵本によるボランティア活動の実践

インターネットが 拓く新しい学校像

●特集2

解説 Part1 インターネットが発信型の学習活動を支える

解説 Part2 インターネットで学校は変わるか？

小学校実践 地域に根ざした体験的活動に基づくインターネットの利用実践

中学校実践 情報活用能力を高めるインターネット活用交流

パソコンは構想、表現活動の夢を広げる



神奈川県横浜市立本町小学校
教諭 出口和生

本校では、従来からコンピュータを道具の中の一つととらえ、教師や子どもたちがコンピュータを必要だと思った場面で活用することを基本としている。最近では、コンピュータは様々なメディアの中の一つととらえるメディアミックスの活用も盛んになってきている。このことにより、コンピュータは、人と人をつなげ、ふれあいの機会を広げるための道具としての活用も増えてきている。

また、コンピュータのマルチメディア化を進めるだけでなく、図書、校内資料等の情報メディアの扱い方も再検討を行い、コンピュータとの連携を深めることと、コンピュータ・ネットワークの実践にも取り組んでいる。

学 習環境の整備

コンピュータールームがあっても
コンピュータは入っていない。
本はあっても、図書室がない。
そして、横浜市立本町小学校は
『教室があっても教室ではない』

オープンスペースの校舎構造を生かし、各学年の学習センターや多目的ホールに情報メディアである『図書』と『VTR』と『コンピュータ』を分散配置しているからである。授業中はもちろんのこと、登校してからの始業前、

休み時間、放課後には、子どもたちも教師も自由にメディアにふれる姿が見られる。

各学習センター（オープンスペース）へ数台ずつコンピュータを配置し、授業中も休み時間も、子どもたちも教師も、いつでも自由に使えるようにしている。

この環境設営によって、コンピュータは子どもたちにとってさらに身近なものになり、教師も個別学習の時間等を利用して積極的に活用するようになった。また、その活用の方法も多様になり、コンピュータを学習の道具として利用することが定着してきている。



▲ 6年学習センターのコンピュータ&図書の分散配置

コンピュータに触れながら基本的な操作を身につけると同時に、その特徴をつかみ、その能力の素晴らしさと限界を体験することは、今後コンピュータを積極的に利用していく素地をつくるであろう。また、コンピュータの持つ様々な機能を活用することによって、情報に対する見方を広げたり、より深い分析ができるようになると期待できるであろう。

「文章」「音声」「絵画」表現の融合

一度書いた手書き文章をもう一度全部書き直すということは、大人でも嫌なものであるが、子どもにとっては嫌を乗り越えて、苦痛を伴う作業のようである。一生懸命に書いた文章が、校正によって全面的に書き直さなくてはならなくなることは、字を書くのが苦手な子にとってはたいへん辛いことであり、作文嫌いの子が増えるは、このときが多くなるだろう。

そこで、ワープロによる入力を行えば、この問題はクリアされることになるのは明かであるが、ここでもう一つ



▲あったらしいなこんな島

の大きな障害に突き当たることになる。キーボード入力という障害である。キー配置や漢字変換の仕組みを理解した子どもにとっては、キーボードは楽しい道具であろうが、そうでない子どもにとっては、時間のかかる大変な代物なのである。

ところで、小学校の国語学習では、「表現」が重視されてきている。特に音声表現について、すべての学年において重視していくことが必要である。実際の教育現場において音声表現を重視した指導を行うには、一人ひとりの

子どもが音声表現をする機会を多くし、さらにその表現について自己評価や子ども同士の相互評価をしていくことが考えられる。

「書き直し」と「キーボード」、そして、国語科としての「音声表現の重視」という問題をすべてクリアできる可能性のあるものとして、マルチメディア・コンピュータの活用を考えることができるであろう。すなわち、コンピュータによる録音機能を活用することによって、キーボードを使わずに簡単に書き直しならぬ「録り直し」ができ、このことは自己評価をしながら音声表現を繰り返し行うことになるのである。

(1) あったらしいなこんなもの

4年生の国語学習に「あったらしいな、こんなもの。」という学習がある。自分があったらしいと思うものを短い作文にする学習であるが、ここでマルチメディア・コンピュータを活用した授業構想を考えることができる。すなわち、あったらしいと思うものをコンピュータの画面上にお絵かきソフトで画像表現し、さらにそこに自分の声で音声表現の説明をつけたり、ワープロで文章表現をしたりするのである。子どもたちは、何度も何度も自分の音声



▲子どもたちの活動の様子

表現を自己評価して録り直しをしていたことはいうまでもない。

つまり、ここでは自分のイメージを「文章表現」したものに「絵画表現」と「音声表現」の二つを融合させて、マルチメディア作品を完成させたことになる。コンピュータならではの機能を生かしたこうした使い方は、子どもたちのイメージを広げ、表現力を高めることにたいへん効果がある。

この「あったらいいなこんなもの」が初めて実践されたのは、平成6年度のことであった。この年度、本校には「100校プロジェクト」でインターネットに接続しようという計画が進んでいた。インターネットでは、画像や文字に加えて音声も通信することができるので、まさにこの「あったらいいなこんなもの」はインターネットを活用する第一段としてうってつけの素材であった。しかし、100校プロジェクト計画の遅れにより、この平成6年度「あったらいいな、こんなもの」は、インターネット上で日の目を見ることがなかった。続く平成7/8年度にも同様の実践が続けられ、平成9年度には、初めからインターネットでの発信を意識しての実践が行われる予定である。

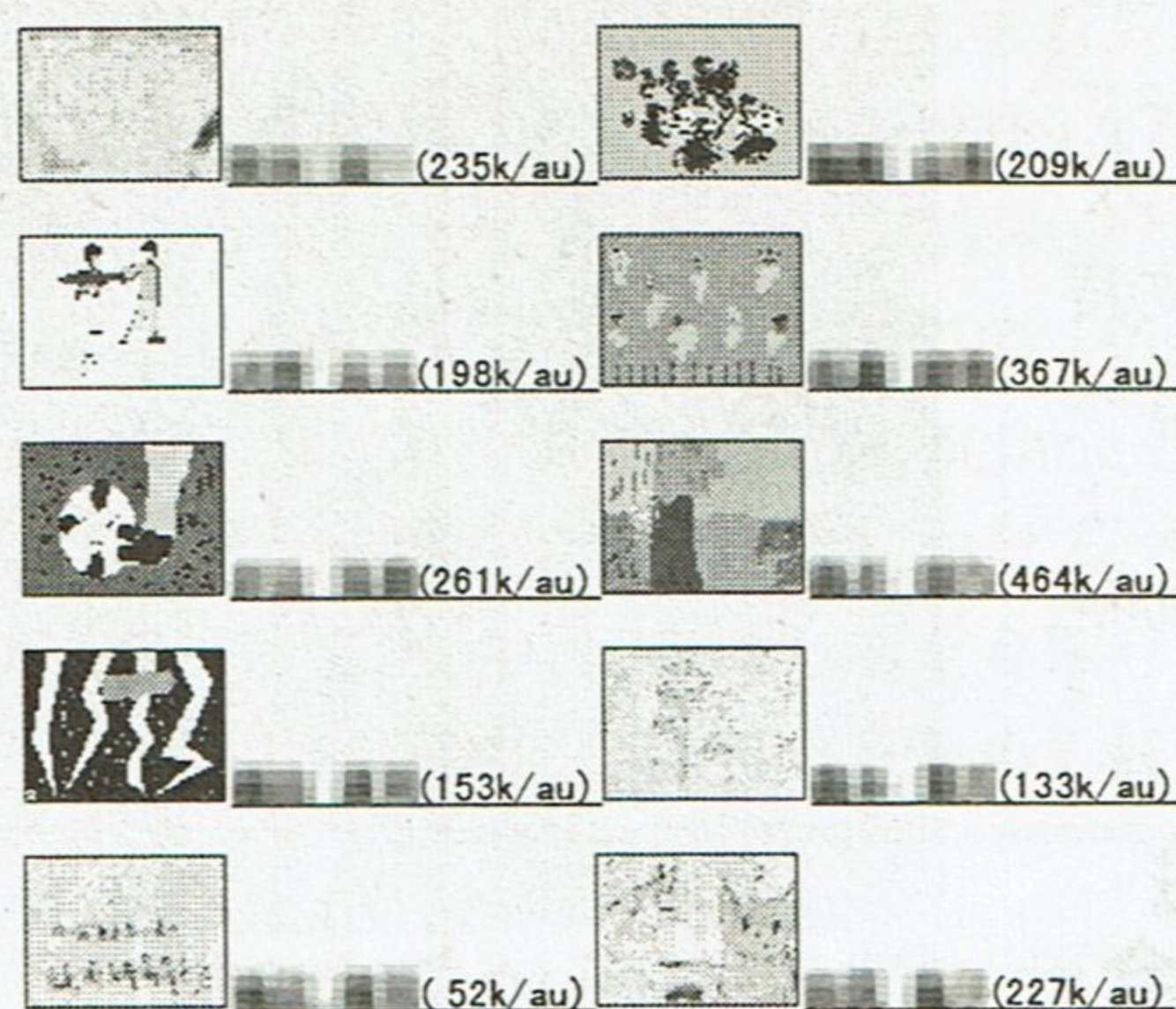
(2) 詩の広場

前述のように「文章」「音声」「絵画」という表現を融合することによって、大きな効果が認められることが明らかになってきた。それに加えて、表現作品を発信する対象を明確にすることによって、さらに学習効果が上がることも確認されている。

そこで、同じ4年生の国語学習「詩の広場」では、「あったらいいな、こんなもの」と同様に、「文章」「音声」「画像」を融合させたマルチメディア作品を作成することになった。ただし、

4年1組の国語の学習です。

各自の詩にお絵描きソフトの絵とマイクで音声をつけました。絵をクリックすると縮小前の画像ファイル、文字をクリックすると音声ファイルを呼び出します。



▲「詩の広場」ページの一部

ここでは、完成した作品をインターネット上に公開することを子どもたち自らが意識して、活動をすすめていくことにした。

他人から評価されることを意識したこれらの作品は、「あったらいいな、こんなもの」よりも当然レベルアップしたものとなっていった。

さらに、予想外の出来事として、保護者や地域の方からの作品評価メッセージをいただくこともできた。また、授業参観のときに「詩の広場」作品集を公開したことにより、保護者が自分の子どもの友だちに対して、評価を返すこともできた。

このことは、たとえインターネットに接続されていなくとも、校内ネットワークなどを利用して、授業参観などの学校開放のときに保護者からのメッセージが期待できることにより、子どもたちの発信意欲や作品自体の質の向上にも大きな効果が期待できるということであろう。

「詩の広場」のような形態を利用して、保護者や他の学校と作品交換ができる日も近いことを感じている。

(3) 短歌と俳句

「詩の広場」で切り開かれた「他人からの評価」を、さらに押し進めようとして考えられた実践に、6年生の「短歌と俳句」がある。この国語学習において大切なことは、自分のつくった短歌や気に入った有名な短歌を、気持ちを含めて朗読することである。また、朗読する際に「自己評価」「相互評価」を行って、国語科ということ配慮しての「画像」を除いた、「文章」と「音声」との融合作品である。そうすることにより、「文章表現」のレベルを高めることをねらった。

そこで、自分で短歌をつくった後、その作品を自分の思いをこめて朗読するという展開を考え、短歌をコンピュータで録音して、自分や友だちの朗読を何度も聞き合うことを考えた。また、6年生では作品だけでなく、自分の気持ちを込めた作品解説をつけることにした。

ところで、本校には、校内ネットワークが構築されている。6年生が書き込んだものは、インターネットを通じて学校外に公開されるとともに、校内のどこにいても、それらの作品を鑑賞することができる状況にある。最近よく聞かれるようになってきた「イント

第6学年 国語 (ABC校時)

場所：6年学習センター
指導者：出口 植村 和生

標目時本

- ・自分の作った短歌を気持ちを込めて朗読する。
- ・友達や先輩を教える。

因實爲書長

社会科学習では「藤原道長の短歌」を導入として扱い、「国風文化」が花開いた時代があり、そのとき文化が今も残っていることを学習してきた。そこで、それを受けて、国語科でも国風文化の一つとして、短歌を扱うことにした。この学習では、短歌の形式だけでなく、短歌には作者の気持ちや込められていることとに気付き、その思いを音声表現することとをねらっている。

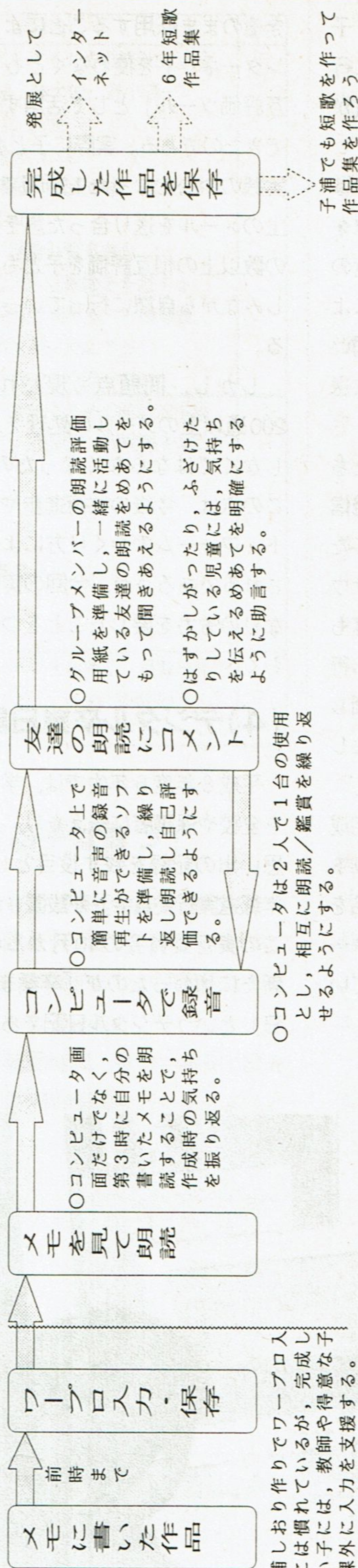
そこでは、自分の短歌を作りたいという子どもの願いを生かした情報発信の手段として、自分の短歌をもちて朗読することとを繰り返して、音声表現の高揚を図る。その際、朗読を繰り返して録音することとを繰り返して、同時に情報活用能力の育成も図る。子浦短歌集に発展することとを期待しているが、「主題／子浦」に向かうことになる。

案開展時本

支援の向上に教育者自身と流れの活動学習

自分の気が持ち上がるように自分の短歌を朗読して、友達と聞き合ったりインターネットで発言したりしよう。

1. コンピュータの録音機能を用いて、自分の作った短歌を朗読する。
2. 友達と聞き合い、鑑賞カードを用いて感想を知らせ合う。



- ### 3. グループ内での鑑賞をする。

○ペアで活動していた児童以外の作品を鑑賞できるようにし、グループ内で鑑賞する時間を確保する。

○朗読のポイントを確認にし、作者の気持ち伝わったかどうかを評価ポイントとすると助言する。

評価の視点と具体的方策

- 自分の短歌をコンピュータの録音機能を用いて、気持ちを込めて何度も朗読しているか。
○友達を朗読を「気持ちが伝わるか」という視点から鑑賞しているか。

- (技能・表現) [作品・朗読・活動]
(意欲・態度) [表情・発言・活動]

国語「短歌」の朗読指導案

ラネット」と呼ばれる環境である。この環境をうまく使うことによって、子ども同士の相互評価を楽しく簡単に行うことができるようになることに気がついた。

すなわち、インターネットの世界ではよく使われている「アンケート・フォーム」という簡易アンケートを児童の作品につけ加えて公開することにより、子どもたちは友だちの作品を聞いた後に、その評価をメールで作者に送るという活動が行えるのである。

実際の授業にあたって、子どもたちは自分の作品をインターネットで発信することを意識し、ノートに推敲した短歌をワープロを使って入力し、サウンド・ツールを使って、何度も何度も自分が満足するまで録音を繰り返し行っていた。子どもたち自ら自己評価しながら、自分の表現力を高めようとしていったのである。

さらに、文章入力と音声入力を完成させた子どもの作品がインターネット上に公開されると、今度はその作品を友だち同士で聞き合って、評価をメールで送り合うという活動に発展していったのである。

インターネット用に作成した作品集をそのまま転用することによって、インターネットを使わなくとも「校内相互評価ツール」として活用することができたのである。実際に子どもたちは、実践の中心となった1週間で200通以上のメールを送り合った。そのメールの数以上の相互評価を子どもたちは楽しみながら自然に行っていたのである。

しかし、問題点も現われてきた。200通以上のメールの処理を、教師がしなくてはならなくなったのである。この点は、今後の技術進歩やアンケート・フォームのつくり方によって解決されるであろうが、今回の実践ではかなりの労力を要したことをつけ加えておく。

(4) デジタル卒業日記

平成8年度6年生では、学年の活動を全校や保護者に伝えたり、6年生の思い出の記録を残す役目として、「6年報道実行委員会」が設置されていた。この実行委員会の10月からの活動に新たに加わったのが「卒業までの119日」というデジタル日記であった。

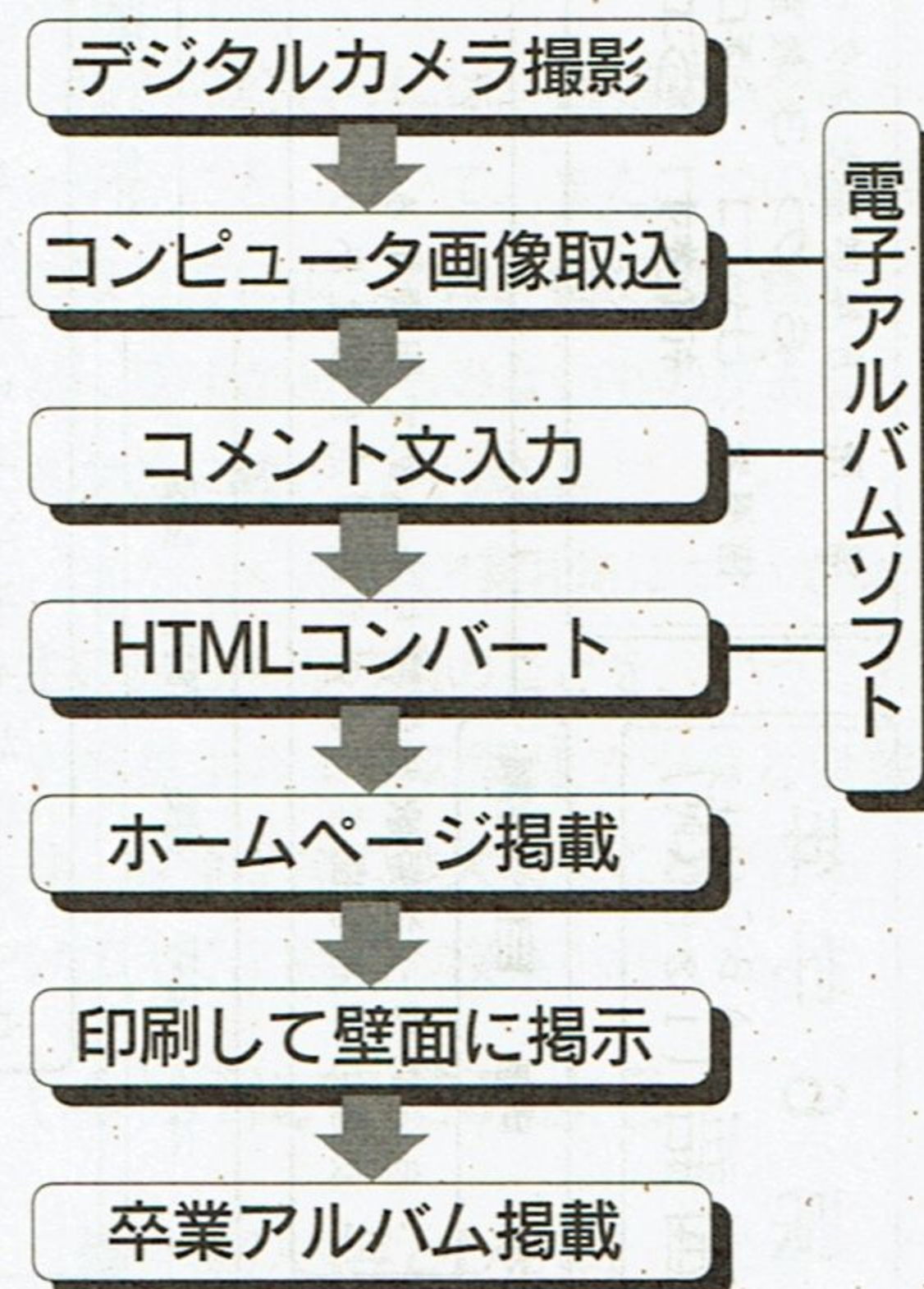
本町小学校ホームページに、毎日、6年生の出来事を載せていけば、校内だけではなく、インターネットを通じて地域の方や保護者にも見てもらうことができる。

まず、報道実行委員の子どもたちは、その日、一日の中で一番特徴的な出来事をデジタルカメラで撮影する。次に、簡易電子アルバムソフトで画像を取り込み、それにコメントをつける。そして、完成した日記をHTMLコンバート機能によって、ホームページに載せていくという活動を行っていた。そして、ホームページへの掲載は、担当教師が行ったが、それ以外のことは、子どもたちが分担を決めて毎日行っていた。

保護者からも「祖父が自宅からインターネットで楽しみに見ているので、がんばって続けてください。」という励ましのコメントもいただいた。卒業式の日には、119ページのデジタル卒業日記ができあがり、現在もホームページ上で見る事ができる。また、この119ページの中から抜粋したものが、「卒業アルバム」の中にも組み込まれることにもなった。



「デジタル卒業日記」入力の様子



「デジタル卒業日記」作成までの流れ

この「デジタル卒業日記」は、次年度（平成9年度）6年生にも受け継がれ、4月5日の始業式から卒業までの1年間の日記に発展していった。1年間継続し、今度は卒業アルバムの中に全記録を組み込んだり、そのままCD-ROMの形で配布したりすることも考えている。

子どもたちの自由な発想で、「画像」と「文章」を融合させた作品……そして、できれば「音声」や「音楽」をも

取り込んだマルチメディア卒業アルバムも夢ではないであろう。

✕ ディアを生かした発信へ

どのような学習でも情報教育の視点から見ると、自分の思いや願いを発信できるということが重要になってくるであろう。前項までに述べた実践は、すべて「自分」を発信することに重点を置いたものである。

子どもたちは、これまでも「自分」を発信する活動を学習の中で行ってきた。しかし、それらの多くは「文章」「絵画」「音声」などの一つの手段でだけのものがほとんどである。しかも「教室」という閉じられた空間の中での発信が多かったことは否めないことである。

ここで、インターネットをはじめとする「メディア」を生かすことができれば、実践の中で述べたようにいくつかの手段を融合した、いわゆるマルチメディアの表現を可能とすることができるようになる。そして、ますます「自分」を発信することができるようになるであろう。

発信の対象を明確に

今後、インターネットをはじめとした、様々なメディアを生かした「自分」の発信が増えていくときに留意しなければならないことがある。

それは、闇雲に情報を発信するのではなく、発信の対象を明確にしなければならないということである。

メディアを使うと、それ自体の操作や楽しさのために、子どもたちは楽しく学習しているような錯覚を起こしてしまいがちである。それではメディアを生かしていることにはならない。メディアを生かした発信をより効果的なものとしていくためには、情報を発信する対象を子どもたち自身が認識していくことが必要である。

誰に対してどのような方法で何を伝えるのかを常に意識して学習していくことで、情報活用能力の育成にもつながり、また、相手の立場を考えながら学習や発信の内容を高めていくことができるであろう。〈でぐち・かずお〉

さあ！卒業までの119ページのスタート！

6年生としてスタートを切った4月から半年。10月1日からいよいよ後半戦に突入です。毎日の出来事を「6年報道実行委員会」が簡易ページ作成ツールで綴っていきます。

卒業までのカレンダー（平成8年10月）

日	月	火	水	木	金	土
		1 あつ118日	2 あつ117日	3 あつ116日	4 あつ115日	5
6	あつ114日	7 あつ113日	8 あつ112日	9 あつ111日	10 あつ110日	11
12	あつ109日	13 あつ108日	14 あつ107日	15 あつ106日	16 あつ105日	17
18	あつ104日	19 あつ103日	20 あつ102日	21 あつ101日	22 あつ100日	23
24	あつ99日	25 あつ98日	26 あつ97日	27 あつ96日	28 あつ95日	29
30	あつ94日	31 あつ93日				

平成8年11月の卒業日記

10月1日



今日は、6年生後半の自分の主題を決めました。僕の主題は、何事も前向きに考えて明るく楽しく生活する。ということです。写真も撮ったし、書写の学習を生かして、字をきれいに書きました。5じかんめ作文書きました。みんなは運動会の後のことや運動会のことを書いていました。



10月日記ページにもどる

▲「デジタル卒業日記」ページから